

# 「歴史総合」のカリキュラム・マネジメントに関する一考察 (2) — 自国史と世界史をどのように関連させるかに着目しながら —

竹中伸夫\*

A study about curriculum management in “General History” (2)  
: On the integration of national history and world history

Nobuo TAKENAKA

(Received October 31, 2019)

## Abstract

The aim of this paper is to clarify the formation and the structure of teaching historical contents in the point of the integration of national history and world history, be based on a series of textbooks “Presenting the past”.

The result of analysis, I clarify the characteristic formation and the structure as a gradual process of solving the problems.

**Key words**: カリキュラム・マネジメント, 教科書分析, イギリス, 歴史総合

## I. 問題の所在

本小論は、まもなく我が国の高等学校に導入される「歴史総合」を念頭に置いた、教育内容編成構造と原理の解明に関する前年度の小論<sup>1)</sup>の継続研究である。(1)と同じく『過去を表現する』シリーズ<sup>2)</sup>を手がかりに、残された課題として挙げた、自国の歴史に関する事象と世界の歴史に関する事象をどのように取り上げて関連付け、カリキュラムとして構成しているかについての構造の解明に焦点を絞って、あらためて分析を行うものである。

(1)において明らかにしたように、本シリーズは、第1巻と第2巻で課題解決のための方法的理解を、第3巻で解釈構築のための多面的・多角的分析(方法の応用)と現代社会の部分的理解をそれぞれ目指しており、第4巻での課題の歴史的分析とその解決策の模索(方法の実践)を方法的・内容的に支える歴史教育内容編成を取るシリーズとなっていた。

では、このような教育目標の実現のために、自国の歴史事象と外国の歴史事象の中から何を取り上げ、どのような順番で、どのように関連付けながら、その実現を目指しているのだろうか。同シリーズの分析を行うことで、我が国の「歴史総合」が目指す教

育目標を真に実現しうる、教育内容編成構造と原理が解明でき、各教師によるカリキュラム・マネジメントの具体的な指針が描けるようになるといえよう。

そのため、以下、Ⅱで取り上げられている事象に着目しながら同シリーズの全体構成を再度分析し、Ⅲで(1)の成果と連動させた教育内容編成構造の解明を行う。

## Ⅱ. 同シリーズの教材選択の論理—イングランドにおける一般的課題解決過程としての歴史事象選択—

本シリーズの教材選択原理を明らかにするために、表1を作成した。表1の「単元名」に関しては、分析対象より訳出した。また、「学習の構造」は、昨年度の研究成果に基づいている。そして最後の「教材としての歴史事象の選択論理」が、本論文において新たにおこなった筆者の分析に基づく部分である。

以下、この表1をもとに、同シリーズの本シリーズの教材選択に見られる方略と構成を巻ごとに詳細に検討しよう。

### 1. 第1巻—現代にも残存する中世的課題を提示するための歴史事象選択—

第1巻は3つの章からなり、各章とも基本的には

\* 熊本大学大学院教育学研究科

イングランドの事象を取り上げているが、それぞれの最後にイングランドに限定されない形式でまとめを行っている。それによって、現代にも変容して残存する3つの中世的な課題の提示を行っているともまとめることができる。

具体的に、第1章「王国の統治：ハイリスク・ハイリターンのゲーム」では、小单元「ウィリアム征服王」から小单元「ウィリアム・ウォレスの死をめぐるいくつかの謎」までで、中世イングランドにおける封建制と君主制の特質と課題、頻繁な交代劇、ケルトとの対立などについて詳細に確認している。その上で小单元「君主制が直面した諸課題」において、封建制と君主制の一般的な特質と課題について指摘している。この構成によって、これまでの中世イングランドの学習内容を一般化することが可能となり、中世ヨーロッパ社会の一般的な政治制度であった君主制と封建制とその課題について把握することになっている。

こうした構成は、第2章、第3章でも同様で、第2章では、中世ヨーロッパ社会の一般的な社会理念であった教会至上主義とその課題が、第3章では中世ヨーロッパ社会の一般的な社会制度であった農奴制とその課題としての貧困の実相が、それぞれ把握されることになっている。

これら3つの章で取り上げられている、君主制、教会、貧困層の日常生活という事象は、現在のイギリス社会においても存在する。しかし、君主制は立憲君主制として、教会はイギリス国教会として、貧困は相対的貧困（格差）として異なる形態となって発生している。そのため、現代にも変容して残存する3つの中世社会の一般的特質の把握が行われていることとなる。社会的特質自体が現代と異なる以上、その結果として課題も、現代とは異なる形態・状態として発生していた、現代にも通じる課題ということになる。このように、これら3つの章によって、現代とは異なる形態で現代にも残存する中世的な課題の提示が行われているとまとめられよう。そのための歴史事象が選択的に取り上げられているのが第1巻である。

## 2. 第2巻—政治的近代化による中世的課題の部分的克服を提示するための歴史事象選択—

第2巻は4つの章からなるが、第4章「時代のイメージ」は、第2巻の学習内容の相対化を行う機能を有する部分とまとめられる。具体的には、歴史における非文字資料の有効性と注意点に関して述べたのち、非文字資料（博物館の企画展）を用いて分析した結果、第2巻で学習したエリザベス1世に関し

て、19世紀と20世紀ではその評価が異なることを指摘している。このことから、第2巻で取り上げた歴史事象の評価や解釈も現在の評価に過ぎないとの認識をほめめかす効果を有しており、第2巻の学習内容の相対化の機能を有しているといえる。

では、残る3つの章で、どのような歴史事象をどのように取り上げていると言えるだろうか。巻の題目だけを見れば、イングランドに関して、1500年から1750年までまんべんなく学習するように見えるが、明らかに事象の取り上げ方に軽重が見られる。この選択によっていかなる歴史教育を目指しているまとめられるだろうか。結論から言えば、イングランドを事例に政治的近代化の軌跡とそれによって中世社会の課題の部分的克服がなされたことを提示しているまとめられるだろう。

より具体的に言えば、第1章から第3章は、3つのパートで構成されている。第1のパートは小单元「事実確認：テューダー王家の諸王」から小单元「1558年11月17日にエリザベス1世が抱えていた諸課題」までで、改革前夜（1558年）当時のイングランドとその周辺ヨーロッパ社会の概要、課題、状況が確認される。ここでの課題は中世社会から引き続く課題（貧困や宗教）でもあるため、中世社会の結果としての近世ヨーロッパ社会の概要の説明とみなすことができる。

第2のパートは、小单元「まずは何から手を付けるべきか？」から小单元「ジャコバイト派のその後」までが相当し、イングランドの政治的近代化としての絶対王政の進展と議会制民主主義の発展、その揺れ戻しとしてのジャコバイトの反乱がそれぞれ語られる。それらによってイングランドの政治的近代化の軌跡を確認する中で、中世社会の課題でもあった王権の不安定性の克服・変容が語られる。とともに、特にその克服に寄与したエリザベス1世を中心とする絶対王政の進展の部分においては、そのほかの中世社会以来の課題であった貧困と宗教に関して、それらにいかに取り組んでどのような成果を上げ、どのような課題が残されたかを詳細に検討している。そのため、イングランドを事例とした政治的近代化による中世の社会と課題の部分的克服のパートとまとめられよう。

そして第3のパート、小单元「1746年のヨーロッパの概要」では、近世ヨーロッパ社会の結果としての1746年当時のヨーロッパ社会の概要、課題、状況が確認される。1588年当時からどのように変貌し、または変貌しなかったか、現代と比してどう違うかを確認することが求められるこのパートは、まとめのパートとみなすことができる。すなわち、中世社

表1 単元構成から見る教材としての歴史事象の選択論理

単元名			学習の構造	教材としての歴史事象の選択論理			
巻	章	節		比較分析		方法の理解	
ブリテン：1066・1500	王国の統治：ハイリクス・ハイリターンのゲーム	事実確認：ウィリアム征服王	比較分析	中世イングランドにおける封建制と君主制の特質と課題、頻繁な交代劇について	君主制と封建制（政治制度）とその課題	現代とは異なる様相で存在する中世ヨーロッパ社会の一般的特質の把握	現代とは異なる形態で現代にも残存する課題の提示
		1066年：3人の後継者へのインタビュー					
		ウィリアムの勝利は確約されていたか？					
ウィリアムは幸運で賢明だったか？							
ヘースティングスの戦い：死闘							
ヘースティングスの戦いを再考する							
ノルマン人による統治を受け入れてもらうために							
ウィリアムの成功							
ウィリアム2世の死をめぐるいくつかの謎							
マチルダによる権力獲得のための企て							
殺しのライセンスは与えられていたか？ベケットの死							
ヘンリー2世とベケット：致命的な対立？							
ローヤル・ジャスティス							
情け深い判決の謎							
国王軍：騎兵隊と歩兵隊							
ジョン王と家臣							
マグナカルタ							
イングランドとケルトの土地							
城塞施設の改良							
ウィリアム・ウォレスの死をめぐるいくつかの謎							
君主制が直面した諸課題			中世の封建制と君主制が抱える一般的特質・課題としての王権の不安定性				
宗教の権力	異端審問：火あぶりの刑	比較分析	中世イングランド社会が教会至上社会であったこと	教会至上社会（社会理念）とその課題	現代とは異なる形態で現代にも残存する課題の提示		
	教会がすべてを握っている						
	地獄へのいざない						
	天国への行き方						
	修道士と修道女の日常						
	私はどの修道会に所属すべきか？						
	宗教と法						
	聖地巡礼						
	聖なる旅か単なる休暇か：すべての巡礼が宗教的なものだったのだろうか？						
	巡礼に際し遭遇した危険						
	ウィリアム・チョーサーと教会						
	なぜユダヤ人は迫害されたのか？						
	中世末期の教会は、墮落していたか否か？						
中世において、なぜ教会はそれほどまでに重要な存在だったのか？							
資産を見せる：ドゥームズデイ・ブック	方法の理解	中世イングランド社会が教会至上主義社会であったこととその墮落	農奴制とその課題としての貧困社会（社会体制）	現代とは異なる形態で現代にも残存する課題の提示			
中世の人々についてよりよく知るために							
農奴にインタビュー							
地主の権力							
騎士道精神は、貧民の生活を改善したか？							
慈善活動は、貧民の生活を改善したか？							
それはおとぎ話か悪夢か：都市への逃散							
ロンドンに住むということは、喜ばしいことだったのか、あるいは苦痛だったのか？							
中世の都市はいかに不潔だったか？							
中世医学という奇妙な科学							
黒死病の呪い							
黒死病の後：人々は幸福になれたのか？							
農民一揆							
ロンドン塔での処刑							
人々の生活はどれほど厳しかったか？			中世イングランドが農奴制と結果としての貧困社会であったこと				
中世の人々：苦しい生活を送っていたのか？	資産を見せる：ドゥームズデイ・ブック	方法の理解	中世イングランドが農奴制と結果としての貧困社会であったこと	農奴制とその課題としての貧困社会（社会体制）	現代とは異なる形態で現代にも残存する課題の提示		
	中世の人々についてよりよく知るために						
	農奴にインタビュー						
	地主の権力						
	騎士道精神は、貧民の生活を改善したか？						
	慈善活動は、貧民の生活を改善したか？						
	それはおとぎ話か悪夢か：都市への逃散						
	ロンドンに住むということは、喜ばしいことだったのか、あるいは苦痛だったのか？						
	中世の都市はいかに不潔だったか？						
	中世医学という奇妙な科学						
	黒死病の呪い						
	黒死病の後：人々は幸福になれたのか？						
	農民一揆						
ロンドン塔での処刑							
人々の生活はどれほど厳しかったか？			当時の農奴が一般的に苦しい生活を送っていたこと（貧困）				
エリザベス1世と彼女が直面した問題	事実確認：チューダー王家の諸王	方法の理解	イングランドを含むヨーロッパ各国の勢力範囲、概要、課題、状況	前提	イングランドの政治的近代化の軌跡（王権の		
	1558年11月17日のヨーロッパの概要						
	1558年11月17日にエリザベス1世が抱えていた諸課題						
	まずは何から手を付けるべきか？						
	巨那探し？						
	生きるか死ぬかの重要な問題としての宗教						
	カトリックとプロテスタントの対立						
	宗教—エリザベス1世の妥協						
	どうとう結婚か？						
	スコットランドのメアリー女王は、エリザベス1世にとって、なぜそれほど悩みの種だったのだろうか？						
	スペインのフェリペ2世は、エリザベス1世にとって、なぜそれほど悩みの種だったのだろうか？						
	スペインのアルマダ艦隊：フェリペ2世の計画の卓越性						
	アルマダ艦隊敗戦に対する現在のスペインの見方						
イギリス国教会にとって、より脅威だったのはカトリックかピューリタンか？							
エリザベス1世が行った貧民救済策							
エリザベス1世は、自身の統治時代、どれほど首尾よく諸課題に取り組んだか？			卓越した女王の登場と直面した課題				
			王権の拡大と封建制の衰退				
			宗教問題への取組				
			貧困対策				
			卓越した女王による課題克服の成果と限界（王権の拡大と限界）				

『過去を表現する』シリーズ	ブリテン：1500・1750	チャールズ1世とオリバー・クロムウェル 事実確認：ステュアート王家の諸王 チャールズ1世：評価が逆転した？ 統治者の良しあしを決めるもの 王にインタビュー 清教徒革命の対立構造 「外敵のいないこの戦争」？ 議会派は結束できていたか？ ニューモデル軍は、どのようにして組織されたか？ 1649年：最終的に権力を握ったのはだれか？ 歴史家と映画製作者は、同じ出来事をなぜ異なって表現するのだろうか？ オリバー・クロムウェルは「戦争犯罪者」だったのか？ クロムウェルの死後、何が起きたか？ カロデンの戦いの顛末 ジャコバイト派とはだれのことか？ ジャコバイト派が勝利するために必要だったもの 反乱1：アイルランドにて、1689-1691年 反乱2：スコットランドにて、1689年 時代はジャコバイト派に味方したか、それとも敵対したか？ 反乱3：スコットランドとイングランドにて、1715年 1715-1745年：ステュアート王家の返り咲きを願った者たち 反乱4：スコットランドとイングランドにて、1745-1746年 ジャコバイト派のその後 1746年のヨーロッパの概要	変化・因果分析	現代イギリス社会の諸課題を考察・解決できる市民の育成	議会制民主主義の始まり(清教徒革命から名誉革命へ) イングランドにおける政治的近代化(議会制民主主義)の軌跡と揺り戻し 反議会制民主主義派(ジャコバイト)との相克 インجلتراを含むヨーロッパ各国の勢力範囲図 1558年時と比べてどう違うか 現在とどう違うか	確立から議会制民主主義へ)と中世社会の課題の部分的克服 治的近代化による中世の社会と課題の部分的克服 近代化による中世的課題の部分的克服 結果と部分的変容	
		ジャコバイトは王位継承にどこまで迫れたか？ 時代のイメージ：肖像画から、エリザベス1世について、何が読み取れるか？ 晩年のエリザベス1世 肖像画が伝えていないこと 現代の映画を歴史的証拠として活用してもよいか？ いつの時代のイメージなのか？展示1：19世紀の歴史家マコーレーの国家像1500-1750 絵画展 展示2：現代の歴史家デービスの国家像1500-1750	資料活用とその留意点		非文字資料の活用方法と解釈について 19世紀と20世紀で、歴史家のエリザベス1世に対する評価が変わったこと	歴史的評価の変化について 学習した内容の相対化	
		何もかもが変化した：産業革命 現在のブリテンは工業化している 農業における変化：1750-1900 輸送における変化：1750-1900 産業における変化：1750-1900 思考実験：もし鉄道がなかったら、産業革命はどうなっていただろうか？ ますます増加する人口 産業革命：原因と結果 新しい機械と動力 犠牲と利益：奴隷は産業革命を金銭的に支えたか？ 女王のリス巡行 工業都市における日常生活 当時の労働環境 革命に抵抗する動き 革命に対処する動き 産業革命は生活水準を向上させたか？ 現在、博物館では産業革命はどのように展示・表現されているか？	現代イギリス社会の理解に資するテーマ(事象)について		産業革命の進展とその結果としての現在 産業革命の進行 正の影響と結果 負の影響と抵抗 資料読解 イギリスによるインド侵攻 イギリスによるアフリカ侵攻 帝国主義とその侵攻がもたらした負の側面 帝国主義の進展とその結果	問題の発生 イングランドを事例とした経済的近代化による現代的課題の発生と 近代化による現代的課題の登場(中世的課題の変容)と	
		日の沈まぬ帝国 大英帝国の発展の歴史 なぜ帝国は、発展したのか 帝国は、どのようにしてインドを支配下に置いていったか？ 帝国の一部となったことは、インドに何らかの利益をもたらしたか？ 探検家たちは、新しい大陸を「発見した」と主張するアフリカの奪い合い 帝国の一部となったことは、アフリカにおけるイギリスの植民地に何らかの利益をもたらしたか？ 帝国の拡大：児童移民制度 児童移民制度は適切な計画だったか？ 戦争というものイメージ：ズールー戦争と兵士の場合 帝国はどれほど偉大だったのか？	方法の応用と現代イギリス社会の部分的		海外進出(戦争) 経済成長による貧困層の減少 貧困の部分的解消 新たな階層の登場	中産階級の暮らしぶり 中産階級の人々にインタビュー 中産階級とは、どのような仕事をしてきた人たちのことか？ 中産階級の人々は、どのような地域で暮らしていたのか？ 中産階級の人々は、どのような余暇を過ごしていたのか？ 絵画やポスターといった印象が入り込みうる視覚資料を、歴史的証拠として信頼することはできるか？	中産階級の具体的生活様式 資料読解

<p>選挙権闘争</p>	<p>1831年時点で選挙権を有していたものと有していなかったもの 1831年当時、男子の一部にしか選挙権がなかったのはなぜか？ 1831年当時、女性に選挙権がなかったのはなぜか？ ベントリッチ蜂起—政府は首謀者らに卑劣な罪を仕掛けたのか？ 改革者たちとの衝突—ピーターラーの虐殺 1832年：第1回選挙法改正とチャーティスト運動 1867年と1884年の選挙法改正 19世紀後半を通じて、女性への態度は変化したか？ 二人の女性活動家 女性参政権をめぐる論争 女性参政権論者とその運動 過激な女性参政権論者とその運動 プロパガンダと女性参政権運動 大義のために死ぬるか？ 過激な手段は、女性参政権運動を盛り上げたか、それとも妨害したか？ 1918年に女性が参政権を獲得したのはなぜか、またそれ以前に獲得できなかったのはなぜか？ 女性の参政権が認められるまでに、非常に長い時間がかかった理由は何か？</p>	<p>の多面的理解と解釈構築</p>	<p>理解</p>	<p>参政権拡大の歴史と民主化</p>	<p>民主化と男女の平等化（人権意識の盛り上がり）</p>	<p>問題の部分的克服</p>	<p>その課題の部分的克服</p>	<p>部分的克服</p>
<p>温かい戦争、冷たい戦争</p>	<p>なぜ、戦争を学ばねばならないのか？ ターニングポイント：歴史の流れを変える出来事 歴史家はどのように過去を整理するのか？ 「準備は万全だ！」 1914年のヨーロッパ：最強の軍事力を有していたのはどの国か？ ドイツによる開戦 膠着状態！ どのようにして膠着状態を脱することができたのか？ 海戦 空戦 第1次世界大戦は、多くの人間にどのような影響を与えたか？ 戦争と平和に対する反応 戦後：強国の交代 1919—1939年：三分野の戦闘への準備 1920年代から30年代における戦争と平和に関する考え方 第2次世界大戦のターニング・ポイントはいつか？ 電撃戦：新種の戦争 空襲 戦後の守りほどのようなものだったのか？ 原子爆弾—新しい時代の始まり？ 第2次世界大戦は、世界にどれほど重大な影響を与えたか？ 「冷戦」とは何か？ 核戦争か冷戦か？ 敵国を罵る 冷戦：ヨーロッパの分裂 アジアにおける冷戦：ベトナム戦争 ベトナム：戦争は続けなければならない アジアにおける冷戦：アフガニスタン紛争 戦略防衛計画と冷戦の終結 1990年代の衝突 重要な出来事：あなたならどう判断しますか？ 人権とは何か 1930年代のドイツ ゲットー（ユダヤ人街）での暮らし 強制収容所と絶滅収容所 ナチスに抵抗したのはだれか？ 戦争が終わり、真実が明かされる ホロコーストはなぜ起こってしまったのか？ もう起こりえないのか？ あなただったらどうしていたらうか？ 医学は人々の暮らしをどのように変えたのだろうか？ ライフスタイルは重要か？ 改良の兆し？ 国民保健サービスの誕生 国民保健サービスは継続できるか？ 健康問題を俯瞰的に考えよう すべての人々が健康であるために まだまだ遠い未来の話？</p>	<p>現代的な諸課題の歴史的的分析とその解決策の模索</p>	<p>方法の実践と現代イギリス社会理解</p>	<p>戦争学習の意義としての課題の現在性</p> <p>第1次世界大戦の原因、過程、結果、現代的影响</p> <p>両大戦間の平和維持の試みとその失敗</p> <p>第2次世界大戦の原因、過程、結果、現代的影响</p> <p>欧米における第2次世界大戦後の状況</p> <p>アジアにおける第2次世界大戦後の状況</p> <p>国家間対立に関する残された課題</p> <p>人権の重要性</p> <p>ホロコーストの概要</p> <p>ホロコーストは第2次世界大戦のドイツ特有の問題ではないこと</p> <p>医療の進歩と健康の問題</p> <p>国民皆保険制度による福祉の充実</p> <p>福祉と医療に関する残された課題</p> <p>アイルランド問題の概要</p> <p>アイルランド問題に関する残された課題</p>	<p>今世紀の大規模な国家間対立とその現代への影響</p> <p>その後の国家間対立とその現代への影響</p> <p>人種対立と人権の問題</p> <p>格差を含む福祉の問題</p> <p>宗教にも起因する対立の問題</p>	<p>戦争（国家間対立）の問題</p>	<p>中世や近代からの課題が、どのように現代イングランド社会において変容し、残存しているか</p>	<p>イングランドが抱える、ヨーロッパ（世界）全体に共通する現代的課題の現状</p>
<p>現代の世界</p>	<p>分断 分断に至る歴史 分断によって暴力の連鎖を止めることができたか？ 血の日曜日事件：本当は何があったのか知っているだろうか？ 1972—1993年：暴力と平和 なぜ平和には程遠いのか？</p>							

分析対象より、筆者作成。表中の「単元名」は訳出、それ以外は、筆者の分析に基づく。

会の結果としての1588年当時のヨーロッパ社会が、イングランドにおける政治的近代化によって、どのように変貌（克服）し、または変貌（克服）せずに残されたか、その概要を確認することで、イングランドを事例に近世ヨーロッパ社会の到達点が確認できるからである。

このようにしてみると、第2巻は4つの章で、イングランドを事例とした近代化による中世社会の課題の部分的克服に関する解釈とその解釈の相対化を意識するための歴史事象が選択的に取り上げられているとまとめられる。

### 3. 第3巻—経済的近代化による現代的課題の成立（中世的課題の変容）とその部分的克服を提示するための歴史事象選択—

第3巻は4つの章からなる。前半の2つの章「何もかもが変化した：産業革命」と「日の沈まぬ帝国」が現代的課題の成立を、後半の2つの章「中産階級の暮らしぶり」と「選挙権闘争」がその部分的克服について扱っているとまとめられ、いずれにしてもイングランドを事例に、経済的近代化によって、中世的課題がどのように変質・改善し、現在に残されているかを確認する構成となっている。

まず、第1章では冒頭の小单元「現在のブリテンは工業化している」において、産業革命の進展とその結果としての現在があること、すなわち、この時代が現代と直接結びついていることを確認する。その上で、現代の工業化をもたらした産業革命に関して、概要と正の側面、負の側面をそれぞれ取り上げている。18世紀後半以降の経済成長によって、確かに工業化がなされ現在にもつながるが、同時に格差が拡大し、福祉の必要性が高まっていったことを確認しており、負の側面も現在につながっていること、すなわち、経済的近代化によって現代的課題が登場したことが確認される。

こうした構成は第2章でも同様である。第2章では、工業化の結果として市場拡大を求め、海外進出を進めていったこと、その結果としてインドやアフリカを支配下に置き、現在のイギリス連邦の礎を築くに至ったが、負の側面としての戦争、植民地搾取（貧困）や移民の強制についても学習している。

このようにこれら2つの章では、経済的近代化とそれによって派生した帝国主義によって、現代的課題が発生したことを確認する構成となっている。これらの現代的課題は、社会の近代化（変容）によって、第1巻で確認した中世の貧困問題が形を変えて再登場したものと言える。第3巻の第1章と第2章は、歴史事象を選択的に配列することで、こうした

中世的な課題の変容の結果としての現代的課題というものを取り扱うことを可能にしているとまとめられよう。

続く第3章では、第1章で扱った課題（貧困）が、その時代に部分的であるが克服されたことを、中産階級の暮らしぶりを具体的に扱うことで確認している。経済成長によって新しい階級（中産階級）が成立したこと、及びその階級の実際の暮らしぶりより、経済成長によって貧困生活から脱出した者がいたことを具体的に実感させているからである。同様に第4章でも、選挙権闘争を通じて、その時代の部分的な民主化と男女の平等化を目指す動き（人権意識の盛り上がり）の把握が目指されている。これまでに確認した政治的な不平等状況の部分的な克服がなされていったことが、その時代の事象を詳細に検討するなかで、把握されていくことになっている。このように後半の2つの章は、イングランドを事例に、現代的課題が部分的にはあるが克服され、現在に続いていることが分かる構成とまとめられよう。こうした課題克服過程は、国によって歴史的な遅速や程度の差こそあれど、ヨーロッパ全体に共通するものと言える。

### 4. 第4巻—イングランドが抱える、ヨーロッパ（世界）全体に共通する現代的課題の現状を提示するための歴史事象選択—

最後に第4巻である。第4巻は4つの章からなり、イングランドが抱える、ヨーロッパ（世界）全体に共通する4つの現代的課題の現状を、残された課題として指摘、把握する構成となっている。

すなわち、第1章「温かい戦争、冷たい戦争」では国家間対立について、第2章「ホロコースト」では人種対立と人権の問題が、そして第3巻「20世紀の医学」では格差を含む福祉の問題が、最後に第4章「北アイルランド：なぜ平和には程遠いのか？」では宗教にも起因する対立の問題について、それぞれ取り扱っている。

また、それぞれの課題の取扱い方においても共通しており、それぞれの課題の概要等を述べたのち、その課題が終わっていないこと、すなわち現在においても引き続き課題であり続けていることが必ず確認される。例えば、第2章では、第2次世界大戦中のホロコーストの実情が確認されているが、それは普遍的な問題である人権にかかわる問題であることが冒頭で確認されており、また、小单元「もう起こりえないのか？」では、ホロコーストが第2次世界大戦のドイツ特有の問題ではなく、これからも起こりえるかもしれない課題であることが明示されている。

このように、第4巻では、イングランドが抱える、ヨーロッパ（世界）全体に共通する4つの現在進行形の課題の現状を、残された課題として指摘、把握する構成となっている。また、ここで取り上げられた4つの課題は、例えば第3章における健康と医療、福祉の問題がそうであるように、これまでの第3巻までにおいて取り上げられてきた課題でもある。そのため、中世や近代からの課題が、どのように現代イングランド社会において変容し、残存しているかを確認することにもなり、これから克服していくべき社会的課題の根深さを暗示する構成ともいえる。

### 5. シリーズ全体の構成の論理—一般的課題解決過程として歴史教育内容編成—

以上のことから、本シリーズは、中世から現代までのイングランドの歴史事象を主たる対象として選択的に取り上げ、事例学習の原則を徹底することで、ヨーロッパや世界に共通する一般的課題解決過程として歴史教育の内容を編成しているとまとめることができる。その際、第1巻のように、事象をそれぞれ取り上げてそれぞれに一般化する方法をとる場合や、第2巻のようにイングランドの事象を取り上げるが、冒頭とまとめとによって一般化する方法、第3巻や第4巻のように、そもそも全体にかかわる課題やそれを学習するのにふさわしい事象だけを取り上げる方法など、各巻で異なる方略を取り入れているが、いずれにしても自国の歴史事象と外国の歴史事象をいかに融合するかにおいて、個別の次元ではなく、原理や構造の次元における融合とその方略としての一般化という教材選択の論理が明確に意識されていることは、特筆に値する。

自国と他国それぞれの歴史の論理にしたがって、事象を選択し教育内容を編成しているのは、社会科としての歴史教育の実現は難しい。そのため、こうした一般化を基軸とした教育内容編成は、自国史と世界史をどのように融合し、歴史教育として再編成するかに関して新しい視点を提供しており、我が国の「歴史総合」の在り方に対する興味深い事例と言えるだろう。

### Ⅲ. 教育内容編成構造—多段的課題分析を踏まえた課題解決学習—

Ⅱにおいて明らかにしたように、本シリーズは、イングランドを事例とした一般的課題解決過程として歴史事象を選択・配列していた。それでは、このように選択・配列することは、(1)において明らかにした方法の理解、方法の応用、方法の実践とい

う三段階とどのように関連し、結果としての教育内容「現代イギリス社会の諸課題を考察・解決できる市民の育成」に資することになっているのだろうか。

この問題を考察するために、図1を作成した。図1の左列は、(1)より明らかとなった方法の三段階、下列は、今回の分析で明らかとなった四段階をそれぞれ示している。そして、両視点を組み合わせた結果としての学習の構造を、中央に明示している。以下、この図1に基づき説明しよう。

まず、第1巻であるが、現代にも残存する中世的課題の提示がなされ、比較分析という方法の理解が行われる構成となっていた。比較であるから、現代にも残存する課題が、現代と様相が異なるのはなぜかを考えることになる。その結果として、同じような課題が中世と現代の社会構造の差によって異なって現れること、すなわち社会が変われば課題の様相が変わることに気づくこととなる。そのため、第1巻は、課題の社会性把握のための教育内容編成と言えよう。

続く第2巻は、政治的近代化による中世的課題の部分的克服について扱い、方法の理解としての変化・因果分析と資料活用が目指されていた。中世的な課題がどのような原因でどのように変化し、いかなる課題となったのか。こうした課題の成立・変容の因果分析を通じて、課題の歴史性（変容）把握が行われているとまとめられよう。

そして第3巻は、経済的近代化による現代的課題の成立（中世的課題の変容）とその部分的克服について扱い、方法の応用と現代イギリス社会の部分的理解が目指される構成となっていた。現代イギリス社会の成立過程とその結果としての現代的課題の把握を行うこととなり、第4巻で扱われる課題の前提となる社会の分析に資する構成と言えよう。そのため、課題の構造的把握が行われているとまとめられるだろう。

最後に第4巻は、ヨーロッパ（世界）全体に共通する現代的課題の現状が取り上げられ、方法の実践と現代イギリス社会の理解とともに、方法の実践が志向される構成と言えよう。そのため解決すべき課題と社会の理解を通じた課題解消の方向性構想のための構成といえよう。

このように見てくると、本シリーズは、現代イギリス社会の諸課題を考察・解決できる市民の育成のために、課題の社会性、課題の変容性、課題の構造的性を把握したうえで、課題について実際に考えるという順序性となり、多段的課題分析を踏まえた課題解決のためのシリーズとまとめられるのではないだろうか。

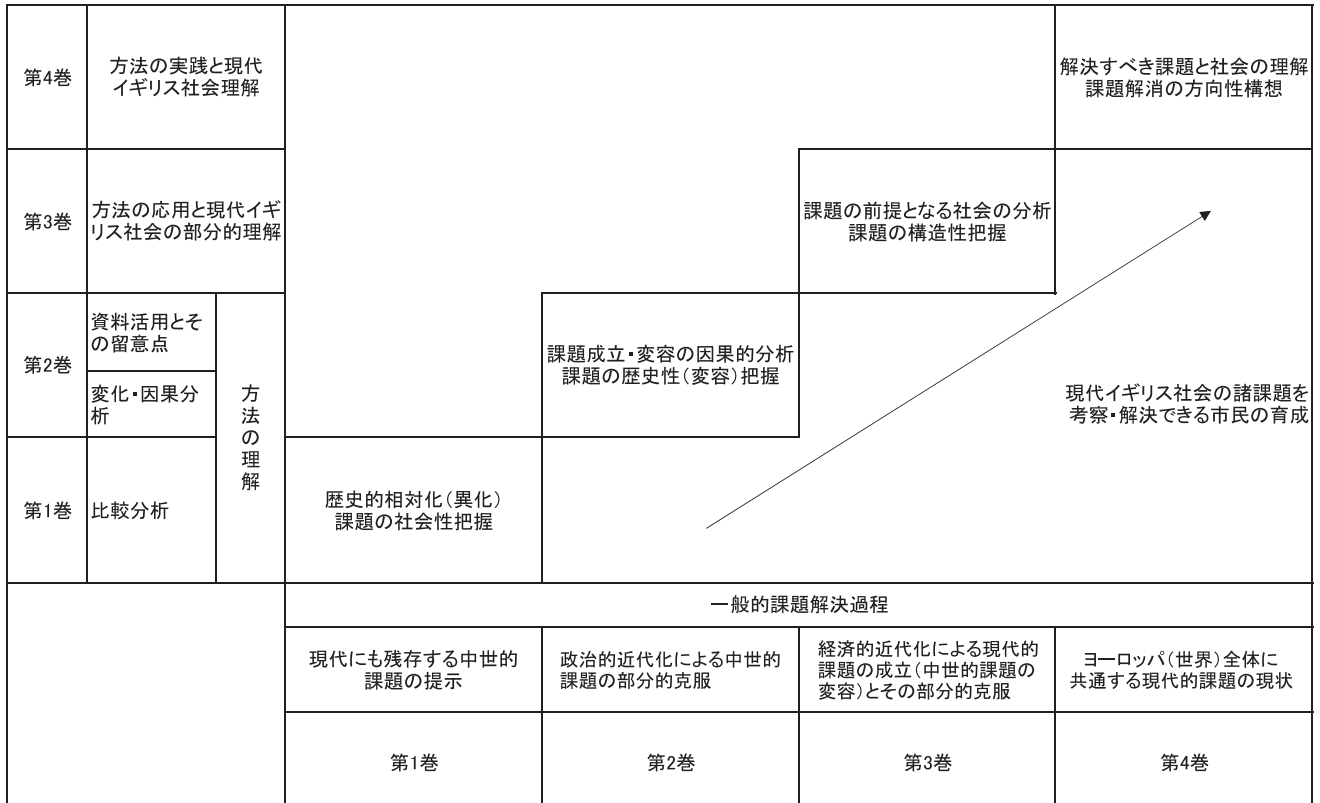


図1 課題解決できる市民の育成を目指した多段的課題分析学習の構造

#### IV. 結 語

#### 注

本小論の目的は、イングランドの歴史教科書シリーズを手がかりに、まもなく我が国の高等学校に導入される「歴史総合」を念頭に置いた歴史教育内容編成の構造と原理を、自国の歴史に関する事象と世界の歴史に関する事象をどのように取り上げて関連付け、カリキュラムとして構成しているかについての構造の解明に焦点を絞って、解明することであった。

分析の結果、一般的課題解決過程という本シリーズの歴史教育内容編成としての特徴を解明し、その構造としての多段的課題分析を踏まえた課題解決学習の構造を明らかにした。

教師によるカリキュラム・マネジメントが真に実施されるために必要なのは、いかなるカリキュラムを再構築すればいいかに関する多様なモデルである。本シリーズは、我が国の「歴史総合」と類似の目標を掲げており、その実現可能性は十分にある。

- 1) 拙稿「『歴史総合』のカリキュラム・マネジメントに関する一考察(1)－『過去を表現する』シリーズを手がかりに－」『熊本大学教育学部紀要』第67号, 2018年, pp. 29-37.
- 2) 分析対象は以下のとおりである。
  - ・McAleavy, Tony, Wrenn, Andrew, Worrall, Keith, *Presenting the Past 1 Britain 1066-1500*, Collins, 2001.
  - ・Wrenn, Andrew, Worrall, Keith, *Presenting the Past 2: Britain 1500-1750*, Collins, 2002.
  - ・Grey, Paul, Little, Rosemary, Worrall, Keith, *Presenting the Past 3: Britain 1750-1900*, Collins, 2002.
  - ・Sparey, Elizabeth, Worrall, Keith, Johnson, Sue, *Presenting the Past 4: The Modern World*, Collins, 2003.